

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

センター長あいさつ

RCC 創設二〇周年を迎えて

RCC センター長 水野 隆一 神学部教授



一九九七年度に発足した私たちのキリスト教と文化研究センター（RCC）は、今年、満二〇年を迎えました。これを機に、記録を整理し、講演会やフォーラム、研究プロジェクトの発表会や成果である出版物などをまとめた冊子、また、このニューズレターをまとめた冊子も作成し、その時々、どのような情報を発信していたかを確認しました。三月には、これまで主任

研究員として関わった方々が中心でしたが、懇談会を開いて、RCCの歩みを振り返り、これからの活動について語りあいました（2頁の記事参照）。

このセンターに初めの頃から

関わっている者として、この冊子に記されている記録を見直す

と、地道に研究を積み重ねてき

たことが実感されます。とりわ

け、五年にわたる編集作業を経

て二〇〇九年に教文館から出版

された『キリスト教平和学事典』

は、はじめて、キリスト教の観

点から平和構築を目指し、その

ために平和を総合的に理解する

ための項目を集めたものとして、

高く評価されています。

最近では、『ミナト神戸の宗教

とコミュニティ』（二〇一三

年三月、神戸新聞総合出版セン

ター「のじぎく文庫」、『現代文

化とキリスト教』（二〇一六年

三月、キリスト新聞社）、『東ア

ジアの平和と和解——キリスト

教・NGO・市民社会の役割』

（二〇一七年三月、関西学院大学

出版会）を、共同研究の成果と

して発表しています。この中で、

『ミナト神戸の宗教とコミュニ

ティー』は、「世界に不寛容な空気があふれる中で国際都市神戸

が育んできた寛容の精神こそが

今日の世界で最も大切なことで

あることを読み取ることのでき

る著書である」ことが評価され

て、井植文化賞（報道出版部門）

を受賞しました。

研究という営みでは、対象を

何にするかが、最初に行われま

す。そして、その最初から、対

象をどのようなものとして見な

すかが、研究の成否を左右する

と考えられています。しかし、

このような研究の姿勢は、一方

で研究を進めやすくするのです

が、もう一方で最初から対象の

見方を限定してしまい、新たな

展開が難しくなる危険もはらん

でいます。

私たちのセンターの記録を見

直してみると、最初の頃は「総

合テーマ」として、『平和学事典』

以降はプロジェクトの研究テー

マとして設定されているものが、

多岐にわたることが分かります。

言い換えると、キリスト教と関

わる「文化」を前もって定義し

ないのが、このセンターにおけ

る研究の姿勢として特徴的であ

ると言えるでしょう。

「文化とは何か」という問いを

出発点とすることは可能ですし、

それによって有意義な研究がで

きるでしょう。しかし、定義せ

ずに、広くキリスト教と関わる

事柄を見つめることは、プロジェ

クトに参加する研究員がそれぞ

れの関心に基づいて自由な研究

を進めることを可能にすると、

私たちは理解しています。

センター長、副長、主任研究

員の体制が新たになった今年度、

二〇二一年に二五周年を迎える

ことを念頭に置きながら、「キ

リスト教主義学校における平和

教育のあり方をめぐって」と

「ポップカルチャーとキリスト

教」の二つのプロジェクトが立

ち上げられました。自由な幅広

い研究からどのような成果が生

まれるでしょうか。RCCの講

演会、フォーラム、研究会など

は公開で行われますので、どう

ぞご参加ください。そして、議

論にも加わっていただいで、私

たちの研究に、より広い視点を

加えてくだされば、幸いです。

RCCの過去・現在・未来を語ろう

―創立二五周年に向けて―

日時：二〇一七年三月八日（水）

一〇時～一二時

会場：関西学院大学

西宮上ヶ原キャンパス

吉岡記念館会議室1

発題者：平林 孝裕（国際学部
教授・宗教主事）

加納 和寛（神学部准教授）

前川 裕（理工学部専任講師・
宗教主事）

キリスト教と文化研究センター（RCC）は一九九七年に設立されました。二〇周年を迎え、これまでの活動を振り返り、二五周年に向けての現在の課題、将来の展望を語り合うための座談会を開催しました。

キリスト教と文化研究センターの歩みは、発足当初の試行



期間を経ているから、自前の活

な研究プロジェクト活動に支えられてきたと思います。今後ともそれを絶やすことがあつてはなりません。「研究業績を出せ（出版せよ）、さもなければ滅びてしまえ」の警句を今一度噛みしめたいと願います。二〇〇九年刊の『キリスト教平和和学事典』は、そのようなセンターの姿勢を明らかにした記念碑だと思いますが、設立二五周年にむけて、あらたな大規模プロジェクトを構想してもよいのではないかと考えます。近年、キリスト教と深い関わりのある主題を扱った映画などが数多く見られます。そのような文化表現を理解する手引き

などが数多く見られます。そのような文化表現を理解する手引き

などが必要とされているのではないのでしょうか。どのようなアイデアがあるか皆さんと考えられたらと夢見ています。少し話は変わりますが、主任研究員の選り方も検討されたらどうかと思います。幅広い学内の認知・協力体制のために新たな知恵が求められていると考えます。

（平林 孝裕）



「キリスト教と文化研究センター」という名称に含まれる、「キリスト教主義」や「文化」は、

現代において当然認められるものではない。それは関学の学生や教職員においても同じである。

これまでは当たり前のように考えていたことを、現代社会においてどのような意義を持つているか再検討するのがRCCの役割ではないか。また、RCCの

活動が関学全体のものとして広がっていくために、「関学における研究」という利点および限界をよく意識し、テーマを考えていくべきである。関学から発信するということをミッションとして活動を考えていくことが望まれる。教育や社会の現場の課題、またキリスト教を含む諸宗教の意義などがテーマとして挙げられる、これまでの活動の資産を生かしつつ、今後の可能性として、関学内部の構成員の強みを生かすための機会を増やし、あるテーマのもとに人々が自然と集まってくるような、まさに「センター」としてRCCが機能していくべきであろう。

（前川 裕）



近現代のキリスト教は、おもに教育・福祉活動、神学の営み、

政治への参与の三つを通じてキリスト教の価値を認識してもらう努力を続けてきました。これは見方を変えれば、キリスト教会の外の文化と対話をするということでもありました。その意味では、

関西学院は創立以来、教育を通じて文化との対話を行ってきたと言えるでしょう。RCCによる平和和学事典の編纂は、教育の現場から出発し、神学と政治の分野をも包括した文化との対話の試みとして評価できます。他方で、生命倫理、宗教リテラシーなど、文化との対話として取り組むべき課題はなお多く見られます。日本でキリスト教を建学の精神に掲げる大学はプロテスタント・カトリックを合わせて七〇校を超えます。関西学院大学はその中でもリーディングユニヴァーシティーとしての力を持っています。今後のRCCの活動が、広く日本中、ひいては世界に貢献するものであることを期待したいと思います。

（加納 和寛）

■研究プロジェクト報告

「ポップカルチャーとキリスト教」

研究代表者 水野 隆一 神学部教授

二〇一三〜一四年の二年間にわたって「現代文化とキリスト教」研究プロジェクトが行われ、その成果は、同名の書籍として発表されました（二〇一六年三月）。

今年、「現代文化とキリスト教」に関わった者たちが再び主任研究員になったことを契機に、その研究を引き継いで、いっそう進めることを目的に、「ポップカルチャーとキリスト教」をテーマに研究プロジェクトを立ち上げることになりました。現代文化とキリスト教では、映画やマンガに加えて、共同体の文化についての研究も行われていましたが、今回のプロジェクトでは、対象となるものを「ポップカルチャー」に限ることにしました。

キリスト教が文化の基盤にあるヨーロッパやアメリカでは、聖書やキリスト教を扱った作品が数多く作られています。小説や詩などの文学、クラシック音楽や絵画、彫刻などの芸術作品、いわゆる「ハイカルチャー」の作品は、これまでも多くの人の注目を集めてきましたし、研究も多くなされてきました。

これらに加えて、二〇世紀後半から、映画やポピュラー音楽、マンガなどの「ポップカルチャー」においても、キリスト教を扱ったり、聖書に題材を取った作品が作られるようになりました。例えば、中村光作のマンガ『聖☆おにいさん』のような作品が生まれ、関心を集めました。『現代文化とキリスト教』でも、『聖☆おにいさん』を扱った

論文が二つ収められています。

今回のプロジェクトでも、研究員がそれぞれの関心から、マンガ、映画、テレビ・ドラマのシリーズ、ミュージカル、ロック・ミュージックなどを対象に選び、聖書やキリスト教がどのように

描かれているか、解釈されているかという分析を通じて、キリスト教と文化の関係を探ること

にしています。秋学期からは、公開の研究会を行います。二年の研究期間が終われば、成果を発表する予定です。

■研究プロジェクト報告

キリスト教主義教育の展開

—キリスト教主義学校における平和教育のあり方をめぐって—

研究代表者 村瀬 義史 総合政策学部准教授

『キリスト教平和学事典』の出版（二〇〇九年）と以後の活動に示されているように、「平和」は本センターの関心事の一つであり続けています。このたび、本センターの継続的な研究プロジェクトである「キリスト教主義教育の展開」において、このテーマを取り上げることとなりました。

昨今の国際情勢と日本社会の変化、そして東アジアで高まる国際的緊張関係を背景に、

学校教育における平和教育はその重要性を増していますが、一方で、「平和」や「平和教育」の概念は多義化、多様化しています。また、第二次世界大戦を直接経験した世代、あるいはその次の世代の人々が教育に従事する時代は過去のものとなりつつあるのです。こうした中で、全人的教育の場であるキリスト教主義学校において広く重視されてきた「平和教育」のあり方を顧み、そ

の今後のあり方を探ることは、本学の「キリスト教主義教育の展開」における重要課題であると言えるでしょう。

この課題は、様々な観点からの学際的研究を必要としています。アジア太平洋戦争の経験、とりわけ広島と長崎における原爆投下の出来事に焦点をすえる「平和」教育は粘り強く継続され重要であり続けているものの、昨今の国際情勢の変化、また、平和と平和教育に関わる多様な理論を視野に収めた「キリスト教主義学校における平和教育」に関する先行研究は数少ないのが現状です。本研究プロジェクトでは、本学における取り組みの歴史・現状をふまえて、他のキリスト教主義学校の実践、そして戦後積み上げられてきた国内の平和教育にかかわる幅広い研究成果から学びつつ、本学における平和教育の今後のあり方を考察してゆきます。

宗教改革五〇〇年記念行事(二〇一七年度・RCC主催のみ)

- ◆七月六日(木) フォーラム
ルター派コラールの始まり
と受容 - Kyrie, Gott Vater in
Ewigkeit を例に
水野隆一(神学部教授、RCC
センター長)
(吉岡記念館会議室)
- ◆一〇月五日(木) フォーラム
テゼ共同体のエキュメニズムに
おける宗教改革の位置
打樋啓史(社会学部教授・宗教
主事、RCC主任研究員)
(吉岡記念館会議室)
- ◆一〇月九日(月) ～一三日(金)
ポスター展(神戸三田キャンパ
ス・アカデミックコモンズイン
フォメーションホール)
- ◆一〇月一六日(月) ～二〇日(金)
ポスター展(西宮上ヶ原キャン
パス・大学図書館エントランス
ホール)
#HereIsland 我ここに立つ
ーマルティン・ルター、宗教改
革とそれがもたらしたもの
主催・大阪・神戸ドイツ連邦共
和国総領事館、RCC
共催・大阪日独協会
- ◆一〇月一六日(木) フォーラム
宗教改革でカトリック教会はど
う変わったか
山岡三治(カトリック司祭、上
智大学実践宗教学研究科・神学
部教授、イエズス会管区長補佐)
(大学図書館ホール)
- ◆一二月一六日(木) フォーラム
ドイツにおいて宗教改革記念日
はどのように祝われたか
加納和寛(神学部准教授、
RCC主任研究員)
(吉岡記念館会議室)
- ◆一二月二七日(月) 講演会
「ルターの薔薇」の成
立事情
蜷川順子(関西大学教授)
(B号館二〇四号教室)

関西学院大学キリスト教と文化研究 第十八号 (二〇一七年三月発行・畠山保男教授退任記念号)

献呈の辞 山本俊正

【論文】

◆キリスト者とユダヤ人の関係
刷新とは何の謂か

ーシヨアー以後のキリスト教神学
構築の試み(その三) 畠山保男

◆イエスとは何者か
ールカ9:18・36の積義的考察
嶺重淑

◆「漁師」ペトロ
ー史実か虚構か 前川裕

◆バルタザールの哲学観
ー現代の神学と哲学に関する
一考察ー 加納和寛

◆ Marlene Paulsen, a J-3 at
Kyushu Jo Gakuin, 1958-1961
Christian M. Hermansen

【二〇一六年度研究プロジェクト報告】
◆キリスト教と現代思想／現代
哲学・「エコノミー／オイコノミ
ア」概念をめぐって 柳澤田実

◆日本における礼拝のインカル

チュレーション 中道基夫

◆キリスト教主義教育の展開

ーキリスト教主義学校における
宗教リテラシーのあり方をめ
ぐって 舟木讓

◆センター長
水野 隆一(神学部教授)

◆センター副長
村瀬 義史
(総合政策学部准教授・宗教主事)

◆主任研究員
舟木 讓
(経済学部教授・宗教主事)

打樋 啓史
(社会学部教授・宗教主事)

東 よしみ(神学部准教授)

加納 和寛(神学部准教授)

◆研究員
平林 孝裕
(国際学部教授・宗教主事)

大宮 有博

(法学部教授・宗教主事)

クリスチャン・ヘアマンセン

(法学部教授・宣教師)

ルース・グルーベル

(社会学部教授・宣教師)

望月 康恵(法学部教授)

難波 功士(社会学部教授)

岩野 祐介(神学部教授)

奥本 京子

(大阪女学院大学教授)

編集後記

二〇一七年度より新体制とな
りましてから初めてのRCC
ニューズレターをお届けしま
す。水野センター長のもと、すでに
各プロジェクトが意欲的な活動
を開始しております。また、宗
教改革五〇〇年にあたる今年、
各地でさまざまな記念行事が行
われています。関西学院でも多
くの催しがありますが、RCC
はそのうち六件を主催していま
す。詳細は関西学院HP等をご
覧ください。皆様のお越しをお
待ちしています。(K)



立事情
蜷川順子(関西大学教授)
(B号館二〇四号教室)

◆日本における礼拝のインカル

◆研究員
平林 孝裕
(国際学部教授・宗教主事)

◆主任研究員
舟木 讓
(経済学部教授・宗教主事)